



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	高等学校における研究授業の在り方に関する一考察：研究授業で高校教師は何に注目しているのか?(fulltext)
Author(s)	金子,幹夫
Citation	東京学芸大学教職大学院年報, 3: 37-48
Issue Date	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/138732
Publisher	東京学芸大学教職大学院
Rights	

高等学校における研究授業の在り方に関する一考察 研究授業で高校教師は何に注目しているのか？

金子幹夫（神奈川県立平塚農業高等学校初声分校）

1. はじめに

高等学校の教師は、研究授業の時に何を見ているのだろうか？という疑問が本稿の初期的問題意識である。本研究に取り組むきっかけは偶然に訪れた。それは2010年に行われた高校における保健体育科の研究授業であった。当日は、高校生を相手に小学校の教師が高校の教師とTTで授業を展開した。参観したのは小中学校教師と大学院生であった。授業がはじまるやいなや、それまで筆者が経験してきた高等学校の研究授業とは明らかに異なる風景が授業を覆うことになる。異なる風景の第一は、各教師の立ち位置である。その時の写真が資料1である。授業開始から終了まで一貫して生徒の側にいたのが小中学校の教師であり、距離をおいて授業を見ていたのが高校教師であった。資料1では生徒が座って作業をしているところを見ている教師と、遠くから授業を見ている教師の姿が捉えられている。



異なる風景の第二は、各教師の談話である。授業時に、この視点の違いはどこから来るものなのかを解明するために参加者一人ひとりをまわって「今何を見ているのか？」という問いを發した。すると、小中学校の教師は「生徒の動きを追いかけている」という回答が最も多かった。この保健体育科の授業は、体育館で行われたバレーボールの授業であった。内容は①本時の目標(作戦をたててチーム力を高めよう)を確認する、②円陣パス、③ラリーゲーム、④作戦タイム、⑤ゲームというものであった。授業が③・④になると小中学校教師と高校教師の授業に関するコメントに質的な差が見られるようになった。小中学校の教師は、ある生徒のグループを指して「〇〇番の生徒が一人チームから浮いてしまっている」「あのコート内のチームは△△番の生徒がリーダー的存在になっているので、そのままゲームを続けさせても大丈夫」というように、はじめて見た生徒達を細かく分析した上で「こちらのコートの☆☆番の生徒が気になるのでT2は一度グループ内に介入するべきだ」と具体的な教師の動きを想定した見方をしているということを教えてくれた。一方で、その時の高校教師の主たる談話は「教師がどのようにバレーボールにおけるパスを教えているのかを見ている」というものが中心であった。距離をおいてみると教師の指導方法がよく見えるというのだ。「膝の使い方や両手の合わせ方を教えるのが難しいのだ」とのことであった。

筆者はこの研究授業をきっかけにして、「いったい教師は研究授業のどのようなところを見ているのだろうか」という疑問を持つようになった。さらに「小中高校の教師は日常の授業でも見ているポイントが異なるのだろうか」、「もしも異なるのならば、高校教師にとってより一層有効な研究授業の在り方とはどのようなものなのだろうか」という課題を追究する必要があると考えた。とはいうものの、その一方でこのような問題意識は筆者の力量をはるかに超える大きなものであることは明らかである。そこで、本稿では高等学校の研究授業の在り方を考える際の資料の末席に加わることを目指して、次のような研究の

目的、方法、経過及びささやかな成果をまとめることを目的としたい。

2. 研究の目的

本研究は、高等学校における研究授業の在り方について考えることを目的とする。この大きな課題にアプローチするためのプロセスとして、次のような具体的な問題を考えることを本稿の目的とする。

第一に、研究授業で高校教師は何に注目しているのかを明らかにしたい。

第二に、研究授業における小学校・中学校の教師と高校教師との視点を比較し分析を試みたい。授業を見るにあたって小中高校の教師は視点が異なるのだろうか。また同じような部分はあるのだろうか。この比較によって高等学校における研究授業の在り方が見えてくるのではなかろうか。

第三に、そもそも小中高校教師の研究授業の見方を比較研究する意義はどういうものなのかを考察したい。ただ単に同じところや異なるところを発見したところで、これからの研究授業に何らかの影響を与えることはあるのだろうか。比較研究の意義そのものを考察し、よりよい研究授業を目指すとはどのようなことなのかを追究したい。

3. 研究の方法

本稿では、小中高等学校の研究授業に参加して、その場면을多方面から写真撮影し、その後の研究協議会での教師の発言内容を記録・分析するという方法を採用した。

研究授業等一覧						
年度	月	小中高の別	学校	概要	参加者	協議会
2006年度	2月	高校	神奈川県立高校(単位制普通科)	教科研究会社会科部会研究授業	教科調査官・高校教諭	
2009年度	11月	高校	千葉県立 高校(普通科)	授業公開	高校教諭・JICA職員	
2009年度	11月	高校	千葉県立 高校(普通科)	授業公開	高校教諭	
2009年度	11月	高校	東京都立 高校(普通科)	授業公開	市民・保護者・学校関係者	
2009年度	2月	高校	東京都立 高校(普通科)	授業公開	高校教諭	
2009年度	2月	高校	神奈川県立高校(単位制普通科)	研究授業	小中高校教諭・大学院生	
2009年度	2月	高校	東京都立 高校(普通科)	研究授業	高校教諭	
2010年度	11月	高校	神奈川県立高校(単位制普通科)	研究授業	高校教諭	
2010年度	6月	高校	神奈川県立高校(単位制普通科)	教育実習 研究授業	高校教諭	
2010年度	7月	高校	神奈川県立高校(単位制普通科)	研究授業	高校教諭	
2011年度	11月	高校	神奈川県立 高校(普通科)	研究授業	指導主事・高校教諭	出席
2011年度	6月	高校	神奈川県立高校(単位制普通科)	授業公開	大学教授・小中高校教諭・大学院生	
2012年度	10月	高校	神奈川県立 農業高校	教育課程研究会主催の研究授業	指導主事・研究委員・高校教諭	出席
2012年度	11月	高校	神奈川県立 農業高校	研究授業	指導主事・高校教諭	
2012年度	1月	高校	神奈川県立 農業高校	研究授業	大学教授・高校教諭・大学院生	
2012年度	6月	高校	神奈川県立 農業高校	教育実習 研究授業	高校教諭	
2013年度	10月	高校	神奈川県立 農業高校	授業公開	高校教諭	
2013年度	1月	高校	神奈川県立 農業高校	研究授業	高校教諭・大学院生	
2013年度	6月	高校	神奈川県立 農業高校	教育課程調査における研究授業	指導主事・高校教諭	出席
2013年度	6月	高校	神奈川県立 農業高校	授業公開	高校教諭	
2009年度	10月	小学校	横須賀市立 小学校	研究授業	小学校教諭	
2010年度	6月	小学校	横須賀市立 小学校	授業公開	保護者	
2012年度	10月	小学校	三浦市立 小学校	研究授業	小学校教諭	
2012年度	12月	小学校	三浦市立 小学校	研究授業	小学校教諭	出席
2012年度	6月	小学校	横須賀市立 小学校	授業参観	保護者	
2012年度	7月	小学校	横須賀市立 小学校	研究授業	小学校教諭	
2012年度	9月	小学校	横須賀市立 小学校	研究授業	小学校教諭	出席
2013年度	10月	小学校	三浦市立 小学校	研究授業	小学校教諭	
2013年度	6月	小学校	横須賀市立 小学校	授業参観	保護者	
2009年度	2月	小中高校	大学院	模擬授業	大学教授・小中高校教諭・大学院生	
2013年度	7月	小中高校	静岡県内の小中高校	研究授業	小中高校教諭	出席
2009年度	11月	中学校	東京都内 中学校	授業公開	小中高校教諭	出席
2010年度	6月	中学校	三浦市立 中学校	研究授業	中学校教諭	出席
2012年度	10月	中学校	三浦市立 中学校	研究授業	中学校教諭	出席
2012年度	9月	中学校	三浦市立 中学校	研究授業	中学校教諭	出席

具体的には、34の研究授業に参加し、撮影した写真は約1700枚になる。内訳は小学校11回、中学校6回、高等学校20回である（小中高による合同開催の研究授業もあるので合計

数が一致しない)。写真は「授業の全体像」,「児童・生徒の動き」,「教師(授業者)の動き」,「参観している教師のパフォーマンス」を中心にできうる限り多方面からの撮影を試みた。参加した研究授業の内訳は資料2のとおりである。これらの授業はすべて教室で行われた座学形式の授業である。

この研究授業の中で,研究協議会に出席することを許されたものにつき,その内容をノートに記録し,テキストファイルにおこした。次に,各教師の発言内容から共通する概念のあぶり出しを行った。その結果,研究協議会における教師の発言は小中高校とも「教材・教科」「教師の授業方法」「児童・生徒の動き」の三点に分けることができるのではないかと考えて分類を試みた。以上の方法を用いて研究を進めていったのだが,その研究の経過をまとめると次のようになる。

4. 研究の経過(1)

(1) 高等学校の研究授業の分析

(ア) 高等学校における研究授業の特徴

高等学校における20の研究授業をノートによる記録と写真を中心に分析した。その特徴をまとめると次のようになる。

第一に,多くの高等学校の研究授業では,後方にイスが用意されている場合が多い(資料3)。このことを複数の教師に示すと「あたりまえではないか」「普通である」というものから「いやいやそのようなことはない」「最近いすは用意しない傾向にある」といったものまで幅広い情報を得ることができた。なぜこのことを第一にあげたのかというと,後ほど分析をすることになる小学校の研究授業では,いすを置いてある教室が皆無であったからである。イスの有る無しは,小学校と高等学校の研究授業において,最も目立つ風景の違いの一つとなっている。



第二に,イスの有無にかかわらず,ほとんどの高校教師は教室の後方から授業を見るスタイルが多いということがあげられる。1時間をとおして同じ場所で動くことなく授業を見続ける傾向が強いこともわかった。授業後のインタビューからは「どのように教科の内容を教えているのかを見ていた」であるとか「発問をした際に答えられない生徒をどのくらい待ってから次の生徒に発問をうつすのかを見ていた」といった主として教師のパフォーマンスを中心に授業を見ているという結果が浮かび上がってきた。このような見方は,教科の専門性の高さを反映しており,講義型を中心にした授業の中に,時折含まれる教師の発問と生徒の受け答えに注目していることがわかる。

第三に、目で学習指導案を追いかけながら、耳で授業者の声を聞くというスタイルをとっている場合が多いということがあげられる。これは、その研究授業（本時）のみに参加している教師だけでなく、継続して指導案研究に参加している教師の中にも見られる傾向であった(資料4)。



ここまでは、研究授業の場面を写真で撮り続け、それを事後に分析した中から現象をとりだして考察を試みた。これらの写真資料からは、各教師のパフォーマンスの特徴を読み取ることができ一方で、一人ひとりの教師がどのような課題を設定して、どのような見方で研究授業に参加したのかまでは読み取ることができない。そこで、次に各教師が研究授業後の協議会でどのような発言をしているのかを分析することで、研究授業参加者の心の中に迫ってみることにしたい。

(イ) 高等学校における研究協議会の特徴

ここでは、研究授業後に行われた協議会における各教師の発言内容を分析した。本稿では、四つの高等学校で行われた研究協議会中の参加教師による発言内容の分析を行った。具体的には、協議会における教師の発言をノートに書き留め、その内容をエクセルシートに入力していった。この入力には前述の通り「教材・教科」「教師の授業方法」「児童・生徒の動き」の三点に分類して行った。その一部が次の資料5である。

資料5		研究協議会における発言内容	
発言者	発言内容	発言内容	発言内容
T
T

この資料は、高校の研究協議会における教師の発言を時系列に入力したものである。「教科・教材」「教師の指導方法」「児童・生徒の動き」の三点のとなりにある数字は発言の文字数である。この数値を合計して各教師が協議会でどのような発言をしたのかを観点別に比較した結果は次のとおりである(資料6)。

この数値から読み取れることは、「授業方法」が最も多く話題になっていることである。教科の専門的な内容に関する話題や、生徒の動きに関する言及が授業方法に比べて極端に低い数値を示していることがわかる。これはどういうことを意味するのか。

資料の	高校の研究協議会における各教師の発言内容 (%)		
	教材教科	授業方法	担当主役の学習活動
高校A	3	88	3
高校B	38	51	11
高校C	7	74	19
高校D	4	83	12
平均	13	74.25	12.5

本研究の目的の第一番目は「高校教師の研究授業を見る視点」を明らかにすることであった。授業中の写真データ及び研究協議会での発言内容から、教室の後方で主として授業者の授業方法を中心にしている教師が多いということが浮かび上がってきた。

次に中学校と小学校での研究授業及び研究協議会における教師の発言内容を分析し、比較検討を進めることにする。

(2) 中学校の研究授業の分析

(ア) 中学校における研究授業の特徴

高等学校における手法と同じ方法を用いて中学校の研究授業の分析を行った。

中学校の研究授業における特徴をまとめると次のようになる。第一に、中学校の研究授業においては後方にイスが用意されることはほとんどなく、参加した教師は立った状態で様々な資料を持ちながら授業を見るというスタイルをとっていた。

第二に、中学校の教師は、授業方法が講義形式の場合には後方から授業者や生徒、指導案等の資料を見ているが、授業中に作業学習がはじまるやいなや教室内を動き回るという現象が見られた。ただし、多くの場合には参加者すべての教師が教室内を動き回るのではなく半数程度の教師が生徒の作業を見て、残りの教師は授業を後方から見続けるという場面が最も多く見られた(資料7, 8)。



(イ) 中学校における研究協議会の特徴

中学校における研究協議会の各教師の発言内容を高等学校の場合と同じ手法を用いて分析した。結果は次のとおりである(資料9)。この資料から考えられることをまとめると次のようになる。

第一に、中学校における研究協議会で話される内容の特徴としては「授業方法」に関するものが最も多いということがあげられる。これは高校の場合と同じ傾向であった。中学校の教師も高校の教師と同様に「どのように教えるのか」ということを協議したいという

ことが読み取れる。

第二に、この数値を高校の平均値と比較すると「生徒の学習活動」に関する発言が増えていることが読み取れる。本稿で分析対象にした中学校の研究授業は教室での座学が多く、前半は教師の講義が中心で、後半には生徒が作業をするという展開が多く見られた。写真の分析でもあげたところであるが、生徒が作業学習をはじめると一部の教師が教室を動き回るといふ光景が見られた。協議会では「本時の単元では、生徒が作業をしているときに、間違えやすいポイントがある。今日はその間違えやすいポイントを生徒がどのように学んでいくのかを見に来た」といふ発言があった。生徒の作業学習の量と協議会における生徒に関わる発言量に関係があるのではないかという疑問が浮かんでくる。

(3) 小学校の研究授業の分析

資料9 中学校の研究協議会における各教師の発言内容(%)			
	教材教科	授業方法	担当生徒の学習活動
中学校A	0	65.6	34.4
中学校B	16	57	27
中学校C	13	63	19
中学校D	11	38	0
平均	12.75	67.15	20.1

(ア) 小学校における研究授業の特徴

ここまで行ってきた中・高等学校と同じ方法を用いて小学校の研究授業の分析を行った。小学校の研究授業における特徴をまとめると次のようになる。

第一に、小学校の研究授業においては後方にイスが用意されることはなく、参加した教師は立った状態で授業を見るというスタイルをとっていた(資料10)。



第二に、小学校の教師は、授業方法が講義形式の場合には後方から授業者や児童または指導案等の資料を見ているが、授業中に作業学習が始まるやいなやほとんどの教師が教室を動き回るといふ現象が多く見られた。そこでは児童の作業がどのように行われているのかをノートに記述する姿が多く見られた。児童の作業や話し合い活動が始まると、授業者を見る教師はほとんど皆無といってもよい状況が各研究授業で見られた。



第三に、小学生を見る視点が教師によって様々であるという特徴を挙げるができる。高等学校や中学校の教室では、教師は教室を動きながら基本的には上から生徒の学習活動を見ているというスタイルをとっている。しかし、小学校では

何名かの教師は児童と同じ目線にまで座って学習活動を見るという光景が見られた。(資料11, 12, 13)

高等学校の研究授業とは全く別の光景が小学校の研究授業では見られた。それでは具体的に小学校の教師はどのような視点で授業を見ているのであろうか。研究協議会での発言内容を分析することによってその傾向を探りたい。



(イ) 小学校における研究協議会の特徴

小学校の研究協議会における教師の発言内容を分析すると次のようになる。

	教材教科	授業方法	児童主体の学習活動
小学校A	9.2	58.8	32
小学校B	21	48	31
小学校C	3	50	34
小学校D	19	56	24
平均	14.3	55.2	30.25

第一に、中・高校に比べて「児童の学習活動」に関する発言が多く見られたということである。例えば「〇〇の児童は、はじめはどのように取り組んでいいのかわからなかったようだが、班員の言葉を聞いて取り組むようになった」という発言や、「今日は△△の児童にはじめから注目していた。どうして学習につまずいてしまうのかを見たかった」といった発言があった。また、授業者からも「本日皆さんに示した学習指導案通りに授業を進めました。実は本時の本当のねらいは☆☆という児童がどのように学習に取り組むのかを見ることにあったのです」という発言があった。いずれも中学や高校の研究協議会では見られない児童の学習活動に焦点をあてた発言であった。

第二に、中・高校の協議会と同様に「授業方法」に関する発言が最も多かったということが判明した。これは小中高校の研究協議会すべてに共通する傾向であった。多くの教師が「どのように教えるのか」という疑問を持って研究授業に臨んでいることが想像される。

5. 研究の経過 (2)

(1) 小中高校の研究協議会における発言内容の比較

ここまでのところで、研究授業における高校・中学校・小学校の特色をみてきた。そこ

で、次に小中高校の研究協議会における参加教師の発言内容を比較してみることにする。資料は前出したものをまとめたもので小中高校それぞれ四校分（合計で12校分）のデータが集計されたものである（資料15）。

資料15 小中高校における研究協議会の発言内容の比較(%)			
	教材教科	授業方法	児童生徒の学習活動
小学校研究授業	14.3	55.2	30.3
中学校研究授業	12.8	67.2	20.1
高校研究授業	13.0	74.3	12.5

ここから読み取れることの第一は、「児童・生徒の学習活動」に関する発言が小学校が一番多く、続いて中学校、高校となっているということである。第二として、「授業方法」に関する発言が小中高校で共通して最も高い数値を示しているということがあげられる。多くの教師が「どのようにして教えるのか？」という点での話し合いを希望していることが読み取れる。第三として、その「授業方法」に関する発言の割合が高校が最も高く、中学校・小学校という順番で低くなってきているということがあげられる。本研究の第二番目にあげた「研究授業における小学校・中学校の教師と高校教師との視点の違い」について、その傾向が徐々に読み取れてきたことがわかる。この数値の意味するところをもう一歩深く考察するとどのようなことが明らかになるのであろうか⁽¹⁾。

(2) 高校の研究授業に関する一考察

本研究の第三番目の目的は「小中高校教師の研究授業の見方を比較研究する意義はどのようなものなのか」というものであった。本稿は、この比較研究には重要な意義があるという立場をとる。

その第一の理由は、研究授業では「教材・教科」、「授業方法」、「児童・生徒の学び」の三点が大きな基盤として意識されることが必要だということがあげられる。その時々の研究テーマにより、この三点の軽重は考慮しなければならないが、どれか一つを欠いてしまったり、どこか一点に集中してしまったりという授業研究では、新たな授業の構築は難しいと考える。実際に高校の研究協議会における教師の発言を振り返ると、生徒の状況を捉える発言が少ない傾向にある。例えば前出の資料7にある高校Aにおける研究テーマは「生徒の思考・判断・表現」の充実を図るための授業研究というもので、約半年間にわたり継続して指導案検討を繰り返してきた後の研究授業であった。このテーマから、授業後の研究協議会では上記の三点（教材教科・指導方法・生徒の動き）に関する発言が多様な視点から述べられるのではないかと予想できるのだが、結果としては「教科教材」に関する発言は3%、「授業方法」についてが89%、「生徒の学び」についてが8%であった。このこと自体がよい協議会か悪い協議会かということを議論することに意味はないと考える。それぞれの教師が抱えている課題について真摯に取り組んだ結果だからである。この研究協議の目的をより一層追究しやすくするためには、三観点（教科教材・授業方法・児童・生徒の学習活動）のバランスを意識した協議が有効なのではない

かという問題提起をしたいのである。

第二の理由として、授業について様々な課題を抱えている教師は、新しい授業案を再構築するために研究を進めている。その再構築という作業に大きなエネルギーを与えてくれるのが他校種の研究授業及び研究協議会なのではないかということがあげられる。高等学校の教師から見ると小学校の研究授業は異文化世界である。高等学校の職員室で小学校で行われた研究授業の写真をみると、ほぼすべての教師が「全く違いますね」と表現する。これを単なる違いとしてみるだけでなく、自らの実践の再構築に必要なエネルギー供給源として捉えるべきではないかと考える。

以上の二点で、小中高等学校の研究授業の比較には意義があると考えられる。

6. 研究の経過（3）

（1）これからの高校の授業の在り方と授業研究

ここまで来て、一つの疑問が生まれてくる。それは、高校の授業は伝統的に講義型が圧倒的に多いことからくる疑問である。そこでは生徒の活動場面が少ないために、必然的に教師は教室の後方から授業を見るスタイルが定着したのであって、生徒の活動する場面が多くなれば、高校教師は小中学校と同様に教室内を動き回るのではないかという指摘である。

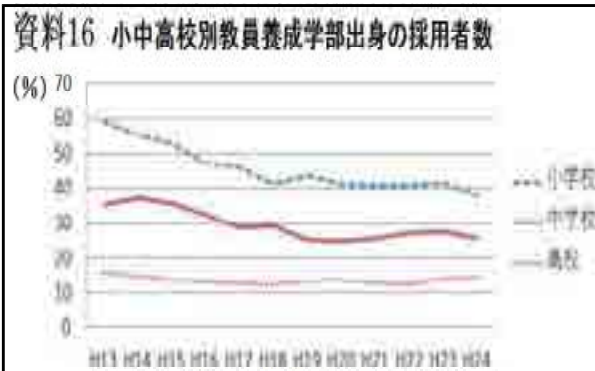
この指摘について、本稿では二つの問題提起をしたい。第一は、高等学校の教師の出身母体に関するものであり、第二は小中高等学校の教師が一堂に集まった研究授業での記録の分析についてである。

（2）小中高等学校教師の出身学部への傾向

次の資料16は、小中高等学校の教師に占める教員養成学部出身の採用者数の割合である。グラフから、教員養成学部出身の教員が最も多いのが小学校で、逆に最も少ないのが高校であることがわかる。ここから、高校教師の授業観は、小中学校教師の授業観とは異なるのではないかというのが第一の問題提起である。

高等学校の教師の多くは、教育学以外の学問を主として研究しており、それとは別に教職課程を履修することにより教員免許を取得している。このことからくる授業観の構築過程が、教育学を研究している学生と異なることから授業を見る眼の違いが生まれ出てくるのではないか。そこで、現在かかえている教職課程に関する課題を中央教育審議会の「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」（平成18年7月11日）からつかみ取ってみたい。同答申では、教員養成・免許制度の現状と課題と題して次のような課題を指摘している。まずはじめに戦後の教員養成について「国・公・私立のいずれの大学でも、教員免許状取得に必要な所要の単位に係る科目を開設し、学生に履修させることにより、制度上等しく教員養成に携わることができる」こととした上で、課題として「教職課程の履修を通じて、学生に身に付けさせるべき最小限必要な資質能力についての理解が必ずしも十分ではないこと」、「教職課程の組織編成やカリキュラム編成が、必ずしも十分整備されていないこと」が指摘されている。一方で、「現行の制度は、幅広い分野から人材を求めることにより、教員組織を多様なものとし、活性化することが期待できるという意味で、教員の資質能力の向上に積極的な意義を有するものである」⁽²⁾という方向性を示している。

高等学校の職員室にはこの指摘のとおり多種多様のキャリアを持った教師が集まっており、現行制度が教育環境の形成には有効であると考え。この制度をより一層充実させたものにするためには、高等学校における授業研究改革がささやかながら影響を与えるのではないかと考える。具体的な手立てとしては、教員養成学部以外の大学における教職課程に、小中高等学校の授業研究に関するテーマを取り入れることを提案したい。特に高等学校の教師を志望する学生にとって、早い段階で小中学校の研究授業に触れる意義は大きいと考える。これから出会うであろう生徒が、どのような授業観を持った教師と学んでいるのかに触れることで高校における授業観の構築はかわってくるであろう。



(3) 小中高等学校同時開催の研究授業

生徒が授業中に活動を行う授業を見た高校教師は、どのような動きをするのだろうか。その傾向を示す研究授業の分析結果を次に示したい。2013年7月26日に静岡県で小中高等学校合同の研究授業が行われた。この研究授業では、全ての校種で新聞を教材にした授業が同時に展開された。



資料17は高校の研究授業がはじまって5分後の様子である。授業内容は「学びあって、自分の意見をつくらう フランス革命 ～ロバスピエールの恐怖政治～」というものであり、授業中に新聞を活用しながら進める授業である。もう一方の資料18は、中学校の研究授業で「さあ、公民的分野を学ぼう～新聞から課題を見つけ、授業で学び、世の中へ発信～」という内容で、生徒が新聞を用いて学ぶという授業がはじまって15分経過時の写真である。どちらの授業も連続で写真を撮り続けたものの中の1枚である。高校の授業風景は、ここまで見てきた高校の授業と同様の典型的なもので、教室の後方から生徒と授業者を見るところであった。一方の中学校の授業でも、後方から授業を見るところという教師と、数名ではあるが生徒のそばによって授業を見るところというグループに分かれていた。この二つの教室は、しばらくこのままの状況が続いた。ところが、ほぼ同時刻の小学校の教室を見ると、それは別世界であった。



資料19と資料20は、同時刻帯に別の教室で行われている小学校の研究授業で「健康なくらしとまちづくり」という新聞を活用する授業内容であった。資料19では、児童がいった

いどこにいるのかがわからないくらい教師が子どもそばに近づいて立っていた。ほぼ同時刻の同じ教室の後方部分を撮影したのが資料20である。席について授業を見ている小学校教師の数が中高校に比べて極端に少ないことがわかる。

授業がはじまって約26分後の高校の教室が資料21である。この前後に生徒は隣の人との話し合いをするという作業を行っていたが、多くの教師は後方から授業を見つめていた。つまり、生徒が活動する場面でも多くの高校教師は後方から授業を見続けるというスタイルを一貫してとり続ける傾向を認識することができた。

ここまでの比較を振り返ると、高校の教師が教室の後方で授業を見ることがわるい作法であるかのように受け止められてしまいそうであるが、本稿ではその様な主張をするつもりは全くない。本研究では、「研究授業で高校教師は何に注目しているのか？」というサブタイトルを掲げている。このテーマのもとで注目点を

解明していきながら、高校教師がより一層多様な視点で授業を見る眼をもつことで魅力的な授業づくりができるのではないかという問題提起をしたいのである。授業の見方の一つとして、教室後方から全体像を見るという作法は授業研究として有効であると考え。これに多様な見方もさらに加えたらどうであろうかということなのである。



7. 研究の成果

研究の成果をまとめると次のようになる。

第一に、研究授業で高校教師が何に注目しているのかという点にせまった。授業を見るスタイルとしては、教室後方から見るという作法が主流であった。研究協議会での発言の内容から、小中学校の教師よりも授業の方法に関するものが多い反面、授業中の生徒の動きに関する見方は少ないということを認識することができた。

第二に、研究授業における小中学校の教師と高校教師の視点の比較を行った結果、授業中の教師の動きが異なることが明らかになった。小学校の教師は、教室の中を動くことに加えて、自らの視線を上下に動かして多方面から児童の動きを見ていることがわかった。さらに、小学校の教師は授業者の動きに注目している場面が高校と比べて極端に少ないことも判明した。研究協議会の発言内容の分析からも、小学校の教師は児童の動きに関する発言が中高校の教師に比べて多いということも認識することができた。ここから、高校教師にとって、これまでの授業を見るスタイルに加えて多様な視点で授業を見ることが新たな授業づくりに多大な影響を与えるのではないかという視点が見えてくると考える。

第三に、小中高校の研究授業を比較検討する意義について考察した。児童生徒は小中高

校の授業を順番に受けて上級学校に進む。一方の教師は、それぞれ自分の所属している校種の授業を主たる研究フィールドにしていることが多く、他校種の授業研究に携わる機会は少ないように思われる。あらゆる教師は、教員免許の取得段階から小中高校それぞれの授業研究の文化に触れることが、児童生徒の成長を見守る貴重な機会になるのではないかと考える。

8. おわりに

冒頭でもあげたとおり、本研究に取り組むきっかけは大学院生と小中高校の教師が集まった一つの研究授業であった。本来その研究授業には別の目的があったのだが、あまりにも一人ひとりの教師の動きが異なったので、研究授業の在り方について一度整理する必要があると考えた。このような大きな課題は、筆者の力量をはるかに超えるものであり、研究成果をあげることは難しいと考えている。先行研究を丹念に調べ上げ、同時に研究授業の取材を継続して行うことで研究方法の基盤を築き上げる必要があると考える。そのためにも研究の初期段階である現時点で、問題提起の全体像を一気に公にして、様々なご批判やご指導を受けることがふさわしいと考えた。先生方のご教示を心からお願いするところである。以上で本稿を閉じる。

【註】

- (1) 本稿では、研究授業における小学校・中学校の教師と高校教師との視点の大きな違いをつかみ取ることを目的の一つとしていることから、様々な諸条件を一旦一定のものとして取り扱っていることを留意点としてあげておきたい。例えば、小中高のそれぞれの研究協議会に出席した教師が、その研究授業にどのような関わり方をしていたのかという点は一定のものとして扱っている。研究授業には、授業日に至るまでに継続して研究討議を続けてきた教師がいる一方で、当該の研究授業にはじめて参加した教師もいる。この違いについては、今後の継続した研究テーマにしていきたい。
- (2) 「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」（抜粋）（平成18年7月11日中央教育審議会）より（http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoin/1268600.htm）
最終閲覧日2014年6月15日

【参考文献】

- 秋田喜代美，キャサリンルイス編著『授業の研究 教師の学習』明石書店 2008
日本教育方法学会編『日本の授業研究－Lesson Study in Japan 授業研究の方法と形態＜下巻＞』学文社 2009